

2017 年度 聖学院大学総合研究所 グローバリゼーションと日本文化研究会 主催
 グローバリゼーションと日本文化研究会
 「河合栄治郎の理想主義的社會主義」 報告



発題者：松井慎一郎 日本文化学科准教授（上段左）

2018年2月28日（水）、聖学院大学4号館4402教室（第一会議室）を会場に、「2017年度グローバリゼーションと日本文化研究会」（聖学院大学総合研究所グローバリゼーションと日本文化研究会主催）が、◇名の参加により実施された。今回の発題は、松井慎一郎氏（聖学院大学聖学院大学人文学部日本文化学科准教授）により、「河合栄治郎の理想主義的社會主義」の論題のもとに行われた。司会は、清水正之氏（聖学院大学学長）、村松晋氏（聖学院大学人文学部日本文化学科科学科長）が担った。

松井氏の発題は、氏が近著として予定している『近代日本における同義と功利』の構想と、氏のこれまでの河合栄次郎研究の蓄積に基づき、河合栄治郎の理想主義的社會主義の意味、その基盤と展開、現代の意味について論じられた。まず、松井氏は、河合は自由主義者として知られるが、ファシズムと共産主義には反対に立ち場を取り、また、祖国を愛したという面ももつ、など多様な意味「で理想主義的な存在であった、と説明したうえで、河合の人生観の根幹にあったものを「人格主義」と規定し、そのルーツを新渡戸稲造からの影響や、

柏会（第一高等学校生による内村鑑三のもとで形成した聖書研究会）での活動に求めて説明した。そしてその人格主義の特徴を、河合が「社会のぞ自分のみならず自他との成長と考察し、そのための環境をどのように形成していくか、労働問題を通して研究したところにある、と論じた。さらに、河合がそのための体系づくりのために官吏から研究者に転じたことを説明し、河合にとって目指すものは人格の発展であり、幸福はその手段であることに河合の本領を見出して論じた。この松井氏の指摘は、河合によるベンサム批判であり、ベンサムの立場がマルクスに受け継がれることにより、河合のマルクス批判に結ばれることが論じられたことは明快な説明であった。

また、河合の理想的社會主義の提唱が、人格主義の上に経済的な意味での社會主義を置くものであり、その社會主義はマルクスの意味ではないことを説明し、その提唱が当時のファシズム盛行期になされこの意味を河合の戦争論と結びつけ、ことに、未公開資料である、「河合栄次郎書簡（1923年1月11日）」を典拠に論じたところには、松井氏の研究のスケールの広さと、探求の深さが反映されるものであった。

質疑応答では、河合の戦争論と当時の中国認識との関連、河合の思想が人格主義において一貫する意味、河合が理想を実現する手段とした議會主義の時代的現実性の評価、松井氏の河合評価と他者よる評価との差異、河合の女性解放への姿勢、などが論じられ、松井氏からは、河合にとっての究極目的はあくまでも理想主義であり、その実現のための自由主義、という総括的説明がなされた。

（文責：小野久志〔おの・ひさし〕 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）